
生徒会の雷帝

雷狐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

生徒会の雷帝

【Nコード】

N6013R

【作者名】

雷狐

【あらすじ】

此処は私立碧陽学園。

日本魔術四大学園の、2番目の学園だ。

今、一人の男が転入して来ようとしている。

彼の名は真儀瑠秋人。

彼は此処碧陽学園でなにをしていくのか？

碧陽学園の裏に潜む《企業》、そして《企業》をまとめる《教団》の存在…。

主な舞台は私立碧陽学園生徒会。

愉快な仲間達と主人公秋人が繰り広げるストーリーはいつたい何処へ向かうのか…
今、全てが始まる。

更新は不定期ですが、
よろしく願います。

感想や一言もお待ちしております。

存在しえないプロローグ

ルール1

神の存在を認め受け入れる

ルール2

彼らに対して直接干渉してはいけない

ルール3

友達の友達は我々

それすなわち干渉限界

ルール4

《企業》の意向は《教団》に任せられた

ルール5

《スタッフ》は個人の思想、又は私情を持ち込むなけれ

ルール6

情報の漏洩は最大にして最悪の禁忌である

ルール7

我々が騙すのはヒトではなく神であることを忘れることなかれ

ルール8

このプロジェクトに道徳心は存在しない

全ては《教団》のために

ルール9

性質上、《学園》の《保守》は最大の命題である

ルール10

《教団》こそが我々の決まりなのだ

追加ルール

今年の生徒会には気をつける

そして

【雷帝】の存在も忘れることなかれ

存在しえないプロローグ（後書き）

次回から本編です。

小説にはない独自の設定も加えているのでよろしくお願いします。

第1話へ邂逅する生徒会へ

此処は私立碧陽学園

俺の名前は真儀瑠秋人^{まぎるあきひと}

明日から2 - Bに編入することになっている。
今いるのは理事長室
なんているかというところ、

「おい、秋人。

ぼーっとするな」

この人は真儀瑠紗鳥

一応俺の姉だ…

「まあまあ、良いじゃないですか」

この方が理事長

実力はかなりある人だ。

実力ってというのは

魔術のこと、詳しくは今から紗鳥姉さんが説明してくれるはず。

「秋人、魔術つてのを簡単に説明しておくぞ。理事長が」

「姉さんが説明すれば良いじゃないですか」

「チッ」

「舌打ちされた…、お願いします」

「分かったよ

まず、魔術。

これは、元々人に宿っている力のことだ。

魔術には属性がある。

さあ、なーんだ？」

「えっと、火・水・雷・地・風だっけ？」

「正解だ。

それらには相性が存在する。『火』は『水』に弱い、『風』には強いみたいなき感じだ。

あとはこれを見ておけ」

そう言つて紗鳥姉さんは

俺に一枚の紙を渡した。

そこには簡単に

【火<水<雷<地<風<火】

と書かれていた。

「そして、まだ2つの属性がある。それは…」

「『光』と『闇』ですね」

「そうだ。

この2つは相性の優劣は無く、強いて言うなら『光』『闇』だな

そして、人はその力を使うことが出来る。主に人が発動出来る属性は1つだ。私は『火』、理事長は『地』だ

ごくまれにだが、多重属性の奴がいるがな
ここまででは大丈夫だな？」

「はい。で、俺は『雷』」

「そうだ。」

次に魔術学園について
日本には魔術四大学園というのが存在する。
ここ碧陽学園はその内の1つだ。存在理由は魔術の使い方を学ぶた
め」

「なんで高等部しか無いんだよ？」

「理由はいくつかある。」

それは主に魔術の発動時期に関係している。
人が一般的に魔術を発動出来る時期は15歳〜16歳だ
だから、高等部だけで充分というのが理由だ
まあ、たまにお前みたいに早い時期から発動する奴もいるが一般的
には時期が存在する」

「なるほど」

「他に知りたいことは？」

「今は特に無いよ」

「そうか。」

あと、秋人お前生徒会に入れよ」

「はあ！？」

「良いじゃないか。」

どうせ、仕事をまともにしないうところなんだから、それに、

『目的』の達成のためにもさ」

「わかってるよ。」

『目的』は必ずやり遂げるから」

「じゃあ、とりあえず生徒会室行くぞ」

「今からかよ!？」

編入手続きは？」

「もう終わりましたよ」

「理事長、ありがとうございます」

「紗鳥姉さん、良いように使ってませんか？」

「気のせいだ」

「昔っから変わりませんね、お二人は」

「そうですね」

「ほら秋人行くぞ」

紗鳥姉さんはもう扉の所にいた。

「はえーよ。」

理事長、ありがとございまして」

「明日から頑張ってたな」

「はい!」

「あ〜き〜と〜」

「待つてよ、紗鳥姉さん。」

失礼します」

俺はさっさと行ってしまった紗鳥姉さんを追った。

「秋人君か…」

まだまだこれからだという歳なのに……

運命とは残酷なものだな……」

理事長の呟きは誰にも聞こえることはなかった

「紗鳥姉さん、今は…」

「その『紗鳥姉さん』ってのは学校ではやめないか?」

「なんでね?」

「なんとなくだ。」

しかし、私は教員だ。

『真儀瑠先生』か、もしくは『GTM』と呼べ」

「『GTM』って？」

「ゴッド・ティーチャー・真儀瑠だ」

「じゃあ、真儀瑠先生で」

「つまらない奴だな…」

「二人の時と生徒会の際は『紗鳥姉さん』でいいよな？」

「まあ、それくらいなら」

「それにしても生徒会か」

「どうした？」

「いや。」

つてか、俺の役職は？」

「生徒会書記補佐だ」

「何故に書記？」

「書記は紅葉知弦。属性は火だ」

「紗鳥姉さんと同じ…」

「アイツはちょっとした女王様キャラだから、お前にはピッタリだ
と思ってな」

「女王様ってちょっとしたしてないだろ!？」

「まあ、大丈夫だろう、多分…」

「多分ってなに!？」

「ここで1つ提案なんだが」

「また急に!？」

「お前入る時合図するから分身を入れる」

「面倒くさい」

「やれ」

「はいはい」

「血とかリアルにしておけよ」

「ってか分身って魔力結構使うんだけど…」

「秋人なら大丈夫だろ」

「分かったよ」

「あと、今日はそれだけで顔出さなくていいからな」

「了解しました」

「魔術耐性ゼロの分身な」

「殺人現場でも作る気か!？」

「ふふふ…」

「怖え」

「さっさとしろ」

「じゃあ、先帰ってるから」

「晩飯はオムライスがいい」

「分かったよ」

ホントにオムライス好きだな」

「よろしく」

俺は分身を作り上げ、
オムライスの具材を買いにスーパーに向かった。

生徒会室

「今日もハーレムだ」

「黙れ、鍵」

「深夏!？」

「相変わらずデレないな」

「まあまあ、深夏。」

「いくらキー君がうざいからって」

「知弦さん!？」

「あなたもさりげなくひどいですね」

「知弦」。

「ウサマロ取って」

「会長、愛してま」

「にやつ!？」

「サイテーだよ。杉崎」

「先輩、そろそろBLの道に来る時ですね!」

「どうしてそうなるのかな？」

「真冬ちゃん」

「ここは俺のハーレム!!」

「というか、碧陽学園生徒会」

俺の名前は杉崎鍵すぎさきけん

生徒会副会長だ

会長は桜野くりむ（さくらのくりむ）

ロリ体系で高校3年生にはどうしても見えない

書記は紅葉知弦さんあかはづしづな

女王様気質でSな人

何故か鞭を常備している

会長と同じ3年生だが

スタイルは天と地ほどの差がある

もう1人の副会長は

椎名深夏しいなみなつ

並外れた運動能力を持っている

運動部にはよく助っ人に行ってるらしい

2-Bでクラス委員をやっていて俺と同じクラス

正義感溢れる女の子だ

会計は椎名真冬しいなまふゆ

深夏の妹だ

体は病弱らしい

運動能力はへっぽこ

よく引きこもってゲームや

MADを作っては動画サイトでは神とまで呼ばれ

いわゆるオタクだ

何故か俺をBLの道に引き込もうとしてくる

1年生で昔は男性に触れると体が溶けるとか思い込んでいたらしい。

深夏の洗脳を受けている

そして、俺副会長の杉崎鍵
この5人で生徒会だ

生徒会顧問には

真儀瑠先生がいる

真儀瑠先生は…

「みんな、揃ってるな」

「こんにちは、真儀瑠先生」

「どうした？ハーレム王（笑）」

「……なんでもありません」

真儀瑠先生は絶対ペースを掴ませてくれない強敵だ
ある意味知弦さんと
同種かもしれない。

「キー君？なにか失礼な事考えなかつたかしら？」

「そんなことある訳ないじゃないですか」

「そうかしら」

「桜野よ、今日は何をするんだ？」

「真儀瑠先生は来るのが遅すぎるんだよ」

「お姉ちゃん、そんなに事実を言わなくても」

「椎名（姉）、私にだって仕事があるんだ。」

椎名（妹）、傷口を広げるな」

「もう終わりましたよ」

「じゃあ、早く帰ればいいだろう」

「雑談してたら真儀瑠先生が来たんじゃないですか」

「そうか」

「相変わらず軽いな!!」

「深夏、大好きだよ」

「近づくな! 鍵!」

「いいじゃんか」

「いい加減にしろよ」

深夏は魔力を解放して……って

「ちよつと待って、深夏

それはヤバいつて!!」

「問答無用! 【雷牙】!!!!」

「ギャー!!」

俺はかわした

死ぬかと思った

「失礼しまーす。」

「紗鳥姉さんいますがつ!?!」

「「「「「!?!?!?!」」」」」

「なんでそこに人がいる？」

「なんで血を流してる？」

「紗…鳥姉…さ…ん…」

「秋人!?!」

「「「秋人!?!」」」

「秋人と呼ばれる人が倒れた。」

「秋人!?!秋人!?!」

「なんで?なんでなんで?なんでだよー!?!」

「深、深夏!?!落ち着け!?!」

「う、うわああああああ」

「深夏がパニックを起こした
真冬ちゃんも放心状態だし、知弦さんは会長を抱きしめて落ち着か
せている。」

「くっ、真冬ちゃん!?!」

「ひっ!?!」

「真冬ちゃんの魔術で傷を少しでも塞いで!!」

「秋人!!秋人!!」

「紗鳥…姉さん…、会…いた…かつ…た……」

「もう喋るな!」

「真冬ちゃん!!」

「無理です!!」

「なんで?なんでなんでなんでなんでなんで!!」

「深夏!」

「なんで!!」

「ごめん、深夏」

俺は魔力を解放し
深夏を眠らせた。
知弦さんも同じことを考えていたのか、真冬ちゃんと会長を眠らせていた。

「秋人!!秋人!!」

「紗…鳥…姉……さん」

「真儀瑠先生！！早く病院へ！！」

「分かってる！！」

しばらくして救急隊が駆けつけ、秋人と真儀瑠先生は病院へ行つた

残されたのは、

やっと落ち着いた深夏と、

現状を理解した会長と真冬ちゃん、

そして、色々考えている俺と知弦さんだ

あれから1時間

今日の生徒会は終わった。

会長は親が迎えに来て帰った

知弦さんも会長と一緒に帰った

真冬ちゃんは香澄さん（深夏と真冬ちゃんの母親）が迎えに来た

深夏は落ち着かせる為に抱き締めていたが、

同時に俺のことを離さなかったため、香澄さんと相談した結果、今

日は俺の家に連れて行く事になった

今、生徒会室には

眠っている深夏と俺しかいない。

俺は壁を殴った。

自分の無力さに腹が立ったからだ

深夏は涙を流していた。

泣きながら、時々俺の名前を呼んでいた

守れなかった…

俺のハーレムを…
深夏を…

「ちっくしょー！」

俺は深夏をおぶって
家に帰って行った。

こうして、

俺と真儀瑠秋人は
出会った。

もう体験したくない
最悪の状況で……

第1話「邂逅する生徒会」(後書き)

次回も早めに投稿します。

キャラ紹介〜碧陽学園生徒会〜

主人公

真儀瑠秋人
まぎるあきと

属性…雷

武器…槍・魔術銃

近・中・遠距離型

槍の投擲に特化している為遠距離からの攻撃も可能
生徒会書記補佐

碧陽学園生徒会

会長

桜野くりむ(さくらのくりむ)

属性…地

武器…上級魔術書

遠距離型

魔術書は半分くらいしか使いこなせていない

書記

紅葉知弦
あかばやしちる

属性…火

武器…鞭・杖

中・遠距離型

中距離では鞭を使用

主に杖で魔術を使用する

副会長

すぎさきけん
杉崎鍵

属性：風

武器：双剣

近・中距離型

属性が風の為、スピードが速く接近戦が得意

中距離からのサポートも出来る

副会長

しいなみなつ
椎名深夏

属性：雷

武器：拳・大剣

近距離型

自らの拳や大剣を使用する為、パワータイプである

会計

しいなまふゆ
椎名真冬

属性：水

武器：杖・中級魔術書

中距離型

魔術が得意で回復系に特化している

生徒会顧問

真儀瑠紗鳥 まぎらさとり

属性：火

武器：魔術銃・鎌

近・中距離型

魔術銃は小型・中型があるので使い分けて戦う

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6013r/>

生徒会の雷帝

2011年10月7日18時01分発行